

2026 年 8 月 10 日

認定 NPO 法人 世界の子どものワクチンを 日本委員会 (JCV)

報道係者各位

【途上国バヌアツで流行した百日咳を抑えた力】
感染拡大の早期抑制に JCV が支援したワクチンが貢献
～現地看護師が語る、ちいさな命を守った接種活動～

2025 年、南太平洋の島国バヌアツで、百日咳（感染症）が流行しました。しかし、認定 NPO 法人 世界の子どものワクチンを 日本委員会（以下 JCV）が支援したワクチンを携えた現地の看護師たちが各地の村を巡回し、出張ワクチン接種を進めたことで、流行を早期に抑え込み、多くのちいさな命を守ることができました。本リリースでは、UNICEF 現地事務所がまとめた証言をもとに、百日咳流行の最前線で子どもたちを守った看護師の声を紹介します。



© UNICEFPacific/2026/8/10

【「ワクチン接種がカギだった」バヌアツで働く看護師の言葉】

モレーノさんは、バヌアツの首都ポートビラの診療所に勤務する看護師。20 年以上のキャリアを持つ彼にとっても、2025 年の百日咳の流行は忘れられない経験だったと言います。

「ある日には 100 人以上の子どもが親と一緒にやってきました。彼らのほとんどがパニック状態で、自分の子どもは果たして安全なのか、と見えない恐怖にみんな怯えていました。」

バヌアツ南部のタンナ島で百日咳の患者が確認されると、ウイルスはポートビラのあるシェファ州の島々にも急速に拡散しました。流行の知らせが村々に伝わると、親たちは子どもを連れて母子保健診療所（Maternal Child Health clinic）に殺到。未接種の子どもに、一刻も早く接種を受けさせようと急いで来た人もいれば、すでに子どもが接種を受けているのに、不安にかられて必死にやってきた人もいました。しかし、流行が拡大していく中でも、JCV が支援したワクチンが十分に確保されており、接種が滞ることはありませんでした。

「接種記録から、どの村に行けばいいか把握できていたため、慌てることはありませんでした。私たちの仕事は注射をするだけではありません。日頃の努力と信頼が大切なのです。」

診療所での対応に加え、モリーノさんたちは、出張ワクチン接種を週 5 日間、実施しました。各地の村を回り、接種が遅れている地域では村長や村の人たちに、ワクチンは安全で命を救う力があることを辛抱強く説明。時には個別訪問まで行って子どもたちの接種漏れを防ぎ、ちいさな命を守るために活動を続けました。モリーノさんたちの努力の結果、百日咳の流行は最小限で抑え込むことができたのです。

「ワクチン接種は、すべての子どもたちに健康な未来をもたらす、大切なものなのです。」



【JCV と支援者の皆さまへモリーノさんからメッセージ】

「私たちと共に支援活動が続けてくださり、ありがとうございます。皆さまのご支援のおかげで、子どもたちを守ることができました。これからもちいさな命を守るために、私たちに力を貸してください。」（原文：“Thank you for standing with us. Because of this support, we could protect our children. Let’s continue working together; their lives depend on it.”）

【百日咳とは】

百日咳は、百日咳菌が引き起こす細菌感染症で、特有の激しい痙攣性の咳を伴う発作が特徴です。大人はかかっても致死的ではない一方、生まれたばかりの赤ちゃんにとっては危険で、窒息したり肺炎や脳炎を起こして命を落とすこともあります。厚生労働省の資料によると、1人が平均で何人に感染を広めるかを示す「基本再生産数」は16-21で、1.3のインフルエンザ（季節株）と比較しても、非常に強い感染力があることがわかります。

十分な免疫を持っていない場合、感染者と接触した際、約80%（インフルエンザは約23%）の人が感染してしまいます。WHOの推計によれば、世界では毎年約2,400万人が百日咳に感染し、約16万人が命を落としています。そのほとんどは、開発途上国に住む5歳未満の子どもたちです。

【バヌアツ概要】

面積：約1万2,190平方キロメートル（新潟県とほぼ同じ）

人口：約32.7万人（2024年、世界銀行）

首都：ポートビラ（シェファ州エファテ島）

バヌアツは、オーストラリア大陸の東にある、83の島々が南北約1,200kmにわたって広がる島国です。そのうち、約60の島に人々が暮らしています。首都はリゾート地として開発されており、欧米を中心に多くの観光客が訪れます。しかし、そこから車で数分も行けば、未だ多くの人々が、畑でのキャッサバ芋や島キャベツの栽培、自生するバナナ・マンゴーの収穫などで自給自足の生活を営んでいます。また、未だに電気が通っていない島も多く残されています。



【バヌアツへの子どもワクチン支援】

JCV が支援を始める以前のバヌアツは、多数の島に人口が散らばっているという地理的な特性から、冷温を保ったままワクチンを運ぶコールドチェーンの整備に大きな課題を抱えていました。ワクチンの接種率も低く、細菌性髄膜炎（ヒブ）による子どもの死者数が太平洋諸国で最も多い国となった年もありました。

現在はワクチン接種が定着してきており、今回の百日咳のように、感染症の流行を最小限で防ぐことができるようになっていました。しかし、島によって接種率に大きな差がある・自国で医師・看護師の育成ができないなど、まだまだ多くの課題を抱えています。



【途上国における感染症の脅威と JCV の子どもワクチン支援の成果】

はしか、破傷風、百日咳などの感染症は、途上国においては日常の脅威として、日々、多くの子どもたちの命と笑顔を奪い続けています。その数は1日4,000人。20秒に1人の子どもたちが、ワクチンを接種すれば防げるはずの感染症で亡くなっています。

私たち、「認定 NPO 法人 世界の子どものワクチン 日本委員会」(JCV) は、途上国の子どもたちにワクチンを届け、彼らの命と未来を守る活動「子どもワクチン支援」を行う民間の国際支援団体です。感染症のワクチンの多くは1人分20円、高いものでも約280円ととても安価です。私たちは UNICEF や各国の保健省と協力し、1994年の創設以来、皆さまのご支援により、約1億3,377万人以上の子どもたちにワクチンを届けてきました。

2025年もミャンマー、ラオス、ブータン、バヌアツの4カ国に約1億1,7751円分のワクチンやコールドチェーン機器を贈ることができましたが、今回のバヌアツでの対応は、この継続的な支援が、子どもたちのちいさな命を守った事例の一つです。



【団体概要】

●団体名： 認定 NPO 法人 世界の子どものワクチンを 日本委員会

●代表： 理事長 剣持 睦子 （ケンモチ ムツコ）

●創設者： 細川 佳代子 （ホソカワ カヨコ、細川護熙元首相夫人）

●本社所在地： 東京都港区三田 4-1-9 三田ヒルサイドビル 8F

●URL： www.jcv-jp.org

●設立： 1994 年 1 月 29 日

●スペシャルサポーター：

竹下景子（ワクチン大使・女優）、和田毅（元プロ野球選手）、早見優（歌手・女優）、三國清三（シェフ・株式会社ソシエテミクニ 代表取締役）、進藤奈邦子（WHO 健康危機管理プログラムシニアアドバイザー）、鏡リュウジ（翻訳家・心理占星術研究家）、安藤優子（ジャーナリスト）、キャップ革命 ボトルマン（株式会社タカラトミー）

<お問い合わせ先>

認定 NPO 法人 世界の子どものワクチンを 日本委員会

広報・啓発・教育グループ 乙津

TEL：03-5419-1081、080-3094-8232 FAX：03-5419-1082

E-mail： otsu@jcv-jp.org